

The Jumonji Press

十文字学園女子大学・短期大学部

新座キャンパスだより

No. 43
2014.2

特報

▶▶▶ 1 第47回 桐華祭 moment ～一瞬を一生の思い出に～
実行委員インタビュー／桐華祭講演会

▶▶▶ 2 授業とつながる図書館づくり

8 「十文字らしさ」を爽やかに発信 9 保護者会 in 浦和 10 十文字ニュース

12 十文字 学びのいま 14 地域貢献レポート 16 教員トピックス

17 女子大生の健康コーナー

18 公開講座レポート／入試情報 20 『ナチュラル十文字』第4号発行

地域フリーペーパー

『ナチュラル十文字』第4号発行

若者たちが秩父巡礼にハマる謎に迫る

埼玉県秩父市で、近年不思議な現象が起こっている。「アニメ」と「聖地巡礼」の言葉に吸い寄せられるように秩父百観音霊場(以下、秩父札所)へ若者の札所巡りが絶えないのだ。いったい何ゆえに……。その答えを求め、本学学生が制作する地域向けフリーペーパー『ナチュラル十文字』の記者・植竹恵美香(コミュニケーション学科)、大嶋理恵(同学科)、リュウソウバイ(メディアコミュニケーション学科)、杉田恵里(同学科)、左紀子(児童教育学科)の5名は、残暑厳しい昨年9月22日、秩父出身の漫画家比古地朔弥さんに導かれながら、秩父巡礼の旅に出発。34か所のうちの定林寺、童子堂、音楽寺を訪れた。

その他、ヘアケア特集やファッションセンス対決、彩の国空揚げ対決など地域を温かく見つめる記事が満載。さらに、『ナチュラル2号』(2012年発行)で特集が組まれた「新座に地下鉄を」の追跡記事など、地元埼玉を女子大生目線で取材している。



平成25年度文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」に選定され、「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」に採択

【私立大学等改革総合支援事業】

平成25年度より文部科学省と日本私立学校振興・共済事業団の共同で開始された事業です。「大学力」の向上を目的に、大学教育の質的転換や、特色を発揮して地域の発展を重層的に支える大学づくり、産業界と国内外の大学等と連携した教育研究など、私立大学等が組織的・体系的に取り組む大学改革の基盤充実に資するため、経常費・設備費・施設費を一体的に重点的に支援するとしています。事業の詳細は文部科学省のHPを参照ください。

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1340519.htm

申請校数は772大学、うち選定は367大学、選定率48%。

十文字学園女子大学、十文字学園女子大学短期大学部はタイプ1およびタイプ2で採択されました。

タイプ1: 大学教育の質転換
タイプ2: 地域の発展を重層的に支える大学づくり

【私立大学等教育研究活性化設備整備事業】

平成24年度新設された補助事業で、私立大学の教育改革の基盤となる教育研究設備の整備を目的としています。昨年度、本学は「リメディアルとラーニング commons の協働による自主学修環境構築」で採択されました。

平成25年度からは上記「私立大学等改革総合支援事業」の支援

対象校において、取り組みの実施に必要な設備費がある場合、補助対象となります。本学はタイプ1およびタイプ2において、什器等の整備を申請し、いずれも採択されました。

タイプ1では、753教室及び9201教室を学生の主体的な学修を促すことを目的とする「アクティブラーニング学習室」とし、キャリア形成におけるプレゼンテーションや討論、グループワークを実施する双方向の授業での利用を予定しています。(平成26年3月完成予定)

タイプ2では、スポーツイベント等の開催の促進をめざし、本学のグラウンド兼サッカー練習場に夜間照明機器6基設置。本学では、一般社団法人十文字スポーツクラブとの連携で十文字ジュニアU12サッカー女子アカデミーを開催しており、夜間照明機器の整備は活動時間の確保だけでなく安全面においても重要です。また今後新座市の協力を得ながら、幅広く地域住民の体力・健康増進に寄与することも目的としています。(平成26年1月完成)

私立大学等教育研究活性化設備整備事業の詳細は文部科学省のHPを参照ください。

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1323178.htm



編・集・後・記

10月下旬に台風が近づいてくるなど、誰が予想したでしょうか。私も桐華祭実行委員として動いていましたが、前例のない事態の連続でした。各局バタバタ、幹部は連日の打ち合わせ。天候により準備日にテントの設置もできず……。実はそんな中の昨年の桐華祭だったのです。学内で最大のイベントである桐華祭に

は委員会スタッフとして約200名の学生が関わり、この事態を乗り越えました。誌面の笑顔の写真が、その答えを切り取っているかと思えます。
委員をはじめ、参加された皆さん、本当にお疲れ様でした!

(高根利佳:編集長)

新座キャンパスだより第43号 2014年2月26日発行
発行人: 木名瀬正行
編集長: 高根利佳 監修: 大西正行、石野榮一
編集総務: 三野裕子 編集事務: 原一彰
発行: 十文字学園女子大学・十文字学園女子大学短期大学部・十文字女子大附属幼稚園
〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28
Tel. 048-477-0555(代表)

*「新座キャンパスだより」へのご意見・ご要望は、kohoka@jumonji-u.ac.jpまで。

表紙の写真

上: ニコニコ農園部の「大根感謝祭」 下左: 図書館クリスマスコンサート 下中央: 第47回桐華祭 下右: クリスマスロールフェスの様子





第47回

桐華祭

moment ~一瞬を一生の思い出に~

昨年10月26、27日の2日間にわたり、十文字学園女子大学最大のイベント「桐華祭」を開催。学生や地域の皆さんなど、2日間で約5千5百人もの方々にご来場いただき、大いに賑わいました。



桐華祭実行委員3名にインタビュー!

「初日の悪天候吹き飛ばした」

桐華祭を無事終え、会見に応じたのは、廣野由香里実行委員長と長谷川彩委員長補佐、永松美南副委員長。

この中で、廣野委員長からは、今回の新しい試みとしてオープニングに合わせ開催された「ファッションセンス対決」について、「投票制にしたことで、参加した4学科すべてに票が入るなど予想を超える反響があった」と語った。また、「出場が4学科しかなかったのは少し寂しかった。来年は全学科で、より華やかに進化していったほしい」と次回に期待した。

初日の台風で一時は中止という意見もあったという。廣野委員長からは「台風のため来場者数は少なかったが、パフォーマーを見に5百人近いお客様が来てくださった。やった甲斐があった。初日も開けてよかった」「2日目は晴れてほっとした。来場数も一気にギョッと来ていただけてうれ

しかった。2日間で約5千5百人の方が来場してくれた。本当にやってよかった。ありがたかった」と語った。

3人は春以降準備を重ね、本番にこぎつけるまでの苦労について、「実行委員会各局の意見をまとめ、慎重な判断しながら問題をクリアしてきた」（廣野さん）、「委員長を支えながら、自分が中心となるファッションセンス対決の企画も組み上げることができた」（長谷川さん）、「1年生と綿密なコミュニケーションを図ることに心を砕いた」（永松さん）と充実した表情で振り返った。

最後に、「桐華祭に関わる全ての方々が最後まで全力で頑張っていたことで、成功することができた。模擬店も悪条件の中、最後まで出していただけたことで華やかに桐華祭を終えることができた」と感謝の意を表した。

すべての方の全力に感謝

「ファッションセンス対決」に歓声

メディアコミ学科が優勝
ファッションセンス対決には、メディアコミュニケーション、生活情報、幼児教育、人間発達心理の4学科がエントリーした。「デート服」をテーマにファッションセンスやコーディネート完成度を競い、来場者の投票の結果、メディアコミュニケーション学科が1位に輝いた。



(沖田有似記者)

廣野実行委員長(中央)と永松副委員長(左)、長谷川委員長補佐(右)

桐華祭 イベント紹介

PICK UP

各クラブ・サークル、有志による模擬店や展示・発表、数々のイベントなど、今回も学生たちのアイデアと努力が詰まった企画が来場者を感動させた。

十文字ラジオ研究部

学食で初の公開収録 マイクトラブル起こるも奮闘



収録する。部員たちは「大勢の観衆の中での収録はとても緊張した」「部屋の大きさも違うので、機材の調整が大変だった。特に音量調節は、音を大きくするとハウリングしてしまい、なかなかうまくできなかった」と苦労話をそれぞれ口にしながらも、一方で「違った経験ができた。1年生の話が上手く、成長を感じた」と喜びも語った。

十文字ラジオ研究部は桐華祭に向けて準備を重ね、1号棟(A)1階の学生食堂で初めての公開収録に取り組んだ。1日目はマイクから音が出なくなるというトラブルが発生し、マイク一本で収録するという事態に、しかし部員たちは落ち着いて対応し、一つの収録が終わるたびに食堂内に拍手があふれた。普段はスタジオ内にこもり、少人数で収録する中で、この収録はとても緊張した。特に音量調節は、音を大きくするとハウリングしてしまい、なかなかうまくできなかった」と苦労話をそれぞれ口にしながらも、一方で「違った経験ができた。1年生の話が上手く、成長を感じた」と喜びも語った。

(沖田有似記者)

留学生科

白玉だんご(中華風)、フォー(ベトナム料理)が好評



以前、水餃子を出した留学生たちは、今回、模擬店を再開した。中国と韓国の留学生たちはあんこ入りの白玉だんご、ベトナムの留学生たちはベトナム料理のチャーシューとフォーを作った。どれも人気で、開店5時間後には売り切れとなった。参加した学生は「もっと材料を買ってきたら、多くの来場者に食べてもらえたのに惜しかった」「完売目標を達成できて、本当にうれしい」と胸を弾ませ、留学生のお薦めメニューが本学の学園祭で評価された喜びを笑顔で語った。

(リュウソウバイ記者)

未来へつながる ボランティア

ゾウキリンくらぶ同好会



ゾウキリンくらぶは2日間、ツリーとドングリ人形の制作体験を行った。体験だけでなく、昨年の夏に行った福島での震災復興ボランティア活動についてパネルを制作し、展示した。また、メンバーが作ったドングリ人形の販売も大盛況で終わった。ゾウキリンのメンバーは「小さいお子さんと一緒に作ったりして楽しかった」「いろいろな方と触れ合えて充実した2日間になった」と笑顔で語った。

(中村有香記者)

すまいるエフエム

前回に続き 2度目の生放送



今回で2回目となる生放送には、桐華祭実行委員長の廣野さんと同委員長補佐の長谷川さんが案内役となり、サッカー部の屋台の行列やニコニコ農園部の野菜販売、ガチコン、ラジオ研究部の公開収録などのイベントを訪ね歩いた。

(沖田有似記者)

声優部

生アテレコ公演 不安と喜びの2日間



声優部は毎年、部員たちによるアニメの生アテレコ公演を行っている。今回は、アニメ「出ましたっ!パワパフガールズZ」の生アテレコを、両日3回ずつ上演した。1日目は悪天候のため、来場者が十数人と少なく、立ち見が出るほどの前年の盛況ぶりとは比べ、空席が目立った。しかし、2日目には、50人以上の来場者を迎え、会場はほぼ満席となった。10人のアテレコ担当だけでなく、司会や受付などの裏方担当も含め、部員22人が息を合わせ、総力を出して2日間を乗り切った。

(森美雪記者)

桐華祭 講演

魂の音を求めて

第47回桐華祭初日の10月26日、津軽三味線演奏家、二代目高橋竹山さんによる「魂の音を求めて」と題した講演会が行われた。独自の音楽表現を追求する竹山さんの語り、魂が込められた三味線の音色が、満員となった会場の9417教室に静かに、そして深い感動を広げた。(中村有香記者)



二代目高橋竹山

竹山さんは津軽三味線の基本を大切にしながら、民謡にこだわらず様々なジャンルの曲の演奏活動に精力的に取り組み、国内外で高い評価を得ている。

10歳で三味線に出会い、17歳の頃、初代のレコードを聴いて衝撃を受け、18歳の時に初代高橋竹山に弟子入りした。6年間の内弟子生活、25年間に及ぶ初代との舞台共演を経て、1997年に二代目を襲名した。

初代竹山は亡くなるまで舞台上に立ち続けた。二代目竹

山さんも一緒に舞台上に立った。全国を共に歩きながら演奏で腕を磨いた。「初代は三味線の本来の音を大事にしていた」と振り返った。

初代竹山は、目がほとんど見えなかったため、二代目竹山さんが支えながら三味線の音色の良さを、国内外の人々に伝えていった。「初代は、目の見えない人は、目の見える人よりも見ることがある」と言った。私はまだ18歳だったので見えない人の気持ちが分からなかった。「初代竹山は、歌が下手な人ほど威張るものだ。大切なのは自分のものを聞いてもらいたいという気持ちだ」とおっしゃっていた。

と話し、自らの表現の原点が初代との共演にあった意味の重さを語った。

二代目竹山さんは話を挟みながら、「津軽あいや節」「三味線よされ」「カーニバル」など一つの

ジャンルにこだわらない曲を、時にモダンで軽快に、時に重々しく演奏。二代目竹山さんが醸し出す繊細で力強い音色と迫力は会場の人たちを魅了した。

「いいものが残るといふことは、その時々の方がもつといいものにしてしまうことが根底にあるはず」「過去の人が体験し、凝縮されたものを未来の人にどうつないでいくか、今の私たちの役目だと思っ

ている」と語った。

初代竹山さんとの思い出を語りながら、三味線の曲を演奏する姿は、日本人が忘れてはいけない魂を思い出させてくれるようだった。また、三味線の音に温かみを感じた時間だった。



「桐華賞」受賞団体表彰式

昨年12月3日、本学理事長室で、第47回桐華賞の授賞式が行われた。全95団体を対象に一般来場者、学生たちによるアンケートの結果、11の団体が受賞し、団体の代表者が出席した。文化展部門では「ラストアイドル もうすぐ社会人」、飲食店部門では「食栄みちこのにんじん洋菓子店」が学長賞を受賞した。

埼玉県芸術文化祭実行委員会会長賞として「声優部」「パイキン」「手話部」奨励賞として「鶴木ゼミ」心ゆとりのおすそわけ」「美術部」「風(間)の谷のふみあき」「熊猫喫茶」「児教3年生でうどん屋さん」「名倉庵」がそれぞれ受賞した。

受賞した団体に横須賀薫学長から賞状や賞金が贈られ、楽しい雰囲気の中、授賞式を終えた。

(中村有香記者)

学長賞	文化展部門	【文化展】「ラストアイドル・もうすぐ社会人」 ・アイドルのコピーダンス
	飲食店部門	【飲食店】「食栄みちこのにんじん洋菓子店」・焼き菓子
埼玉県芸術文化祭 実行委員会会長賞	【文化展】「声優部」 ・部員たちによるアニメーションの生アテレコ	
	【文化展】「パイキン」 ・感染症予防の保健指導等	
奨励賞	【文化展】「手話部」 ・手話コーラス	
	【文化展】「鶴木ゼミ〜心ゆとりのおすそわけ〜」 ・1.ゼミ3年生のメンタルヘルスに関する研究発表 ・2.体験型コーナー	
	【文化展】「美術部」 ・学生作品の展示・販売	
	【文化展】「風(間)の谷のふみあき」 ・(3年生) グループ研究(4年生) 卒業研究	
	【飲食店】「熊猫喫茶」・中華まん 【飲食店】「児教3年生でうどん屋さん」・うどん 【飲食店】「名倉庵」・カステラ	

新システムで身近に 利用者2割増

NEW

LIBRARY

授業とつながる 図書館づくり

とかく敷居が高いといわれがちな大学図書館のイメージをぬぐい学生に身近な存在にしよう、本学図書館(東聖子館長)では改革が進行中で、入館者数も平成24年度12月までの同月比で約20%増(8440名)となる成果も出ている。授業とつながる「場」をいっそう意識した図書館づくりの現場を学生記者が取材した。(沖田有似キャプリアンソウバヤ中村有香 森美記者)

本学図書館では、昨秋リニューアルした図書館システム(OPAC)の導入によって、読みたい本がスピーディーに探し出し、貸出も容易になった。学生や教職員が個人専用として使えるMy Libraryで検索のほか、他大学・他機関からの図書取り寄せの申し込みもでき、ポータルシステムとして充実した。

そのほか、グループスタディールームでもゼミ生同士でデータべイスから卒業論文資料の検索や、卒論発表会の練習などでもできるようになり、図書館との距離感が縮まってきた。

学生記者が図書館を取材



図書館1階奥のグループスタディールームはIT装備が充実した多目的に利用出来るゼミ室のようだった。ここで、図書館の近藤秀二部長から説明を受け、新しくなった検索システムで実際に蔵書を検索し、貸出・返却までを行って見た。

検索を試みたのは最近直木

**グループ
スタディールームで
スピード検索**



貸出と返却も簡単になった。司書の方を過ぎずに、自動貸出・返却機に学生証と本を提示するだけなので、時間が短縮されスムーズな貸出・返却ができるようになったことを実感した。

今年4月からは電子書籍の提供も開始し、就職活動に利用できる見通しで、近藤部長は「司書課程の授業でこのシステムを活用している。今後利用者がいよいよシステムにしていきたい」と話した。

**スマートフォンで
検索OK**

スマートフォンから本学のホームページを開き、「蔵書検索システム利用」をクリックしてみると、可愛いピンク

新しい時代へ漕ぎ出す



図書館長 東 聖子

永田町の国立国会図書館に「真理がわれらを自由にする」という言葉が刻まれています。女子教育の(知の塔)である十文字学園女子大学図書館

の場合は、「真理がわれらを豊かな人間にして、はるかなる道を歩ませる」という願いとしたいものです。

現在、図書館は新しい改革にむけて、地域との教育連携を視野に入れつつ、プロデュースをしています。近未来の本学図書館が「いきいきとした多様な価値ある空間」となるように、皆様には色々ご意見やご協力をお願いいたします。(図書館報「FRONTIER」第1号より抜粋)

続いて、「クイックサーチ」から「就活」のキーワードで入力してみたら、就職活動に関連する本の題名が17冊も出てきた。さらに、その中から1冊を選びクリックすると、その本の詳しいデータや貸出状況も把握できた。スマートフォンを使って、閉館後であっても予約や取り置きもできる。スマートフォンからも簡単に図書館と繋がる新たなシステムの便利さにとっても感心した。

**私たち学生も
加わろう**

図書館の改革に携わってきた石川敬史講師は、十文字学園女子大学図書館の今後のあり方について、「これから、どういった図書館を理想とするか追求していく」と語り、「学生が、図書館に携わることでできる授業を展開していきたい。学生が使うものは、学生がつくるべきだ」「図書館も、図書館のサービスも、つくられていくものだ」と、学生目線で図書館づくりを進

めていく大切さを強調した。司書課程の講義を担当している石川先生へのインタビュー後、学生記者の立場で、今後の本学の図書館像を話し合い、意見が一致した。「図書館のサービスなどが良くなるためにも、学生である私たち一人ひとりが考え、行動すべきだ。そうなれば、図書館の利用環境もさらに向上するだろう」と。

図書館を見る目が変わった取材だった。

未来に「つなぐ」図書館 講師 石川敬史

図書館とは記録された情報や知識を収集、保存し、次世代に「つなぐ」社会的装置です。こうした多様な知が集積される図書館には多くの人々が集い、人間が生きるための活力となる「知の広場」となります。

現在、本学ではライブラリサポーターが図書館キャラクター公募などの取り組みにより学生と図書館をつなぎ、司書課程がPOPの制作や館内の展示企画などにより授業と図書館をつなぐなど、「知の広場」としての活動が行われています。同時に、一人ひとりの想いも本学図書館に集積



され、次学年へ「つなぎ」ます。本学の図書館はともに創られ、ともに「つなぎ」、そして本学全体に活力を育みます。

図書館総合展で優秀賞受賞

昨年10月29日～31日に開催された第15回図書館総合展(会場:パシフィコ横浜)のポスターセッションで、本学のライブラリサポーターが発表した「クロス」する図書館づくりへの挑戦」が優秀賞を受賞した。



発表内容は、本学図書館のキャラクター入賞作品30点に投票できる仕組み作り、図書館情報誌「クロス」発行や図書館クリスマスコンサート開催など、ライブラリサポーターの活動を紹介したものだ。

図書館総合展では、全52点のポスターセッションの中から、来場者の投票と運営委員会の審査により、最優秀賞1点、優秀賞2点、運営委員会特別賞2点が決定した。

Library Report 本の世界にもぐる「もっくん」



頭にはキャンパスのイチヨウの葉。「ブック」と「もぐら」を掛け合わせ「もっくん」というネーミングに。

昨年12月5日、学長室で「図書館キャラクター総選挙」表彰式が行われた。

学生から156点に及ぶキャラクターが応募され、第一次選考で残った30点の入賞作品から、学内投票により、最優秀賞、優秀賞、ライブラリサポーター賞を決定した。

最優秀賞に選ばれたのは、石田桃香さん(表現文化学科1年)のキャラクター「もっくん」。優秀賞は七戸理恵さん(社会情報学科4年)の「もじふくろう」、ライブラリサポーター賞は田中実也さん(人間発達心理学科4年)の「本多さん」が受賞した。

最優秀賞に輝いた石田さんは、「図書館にもぐる、本の世界にもぐる、という意味を込めてモグラのキャラクターにしました」と喜んで語った。



Library Report 本に囲まれ、音楽を楽しむ

大学図書館でのコンサートが注目を浴びているが、本学でも昨年11月28日、図書館で初のコンサートが開かれた。短期大学文学部の卒業生である西尾雅恵さんが歌を担当し、菅谷圭さん(東京芸術大学卒)が電子ピアノで伴奏して、心に響く演奏を披露してくれた。

西尾さんは前半で「恋の悩み知る君は」をイタリア語で歌い上げ、更に日本人に親しみのある「もののけ姫」と「荒野の果てに」を情感たっぷりに歌った。後半では、本学の児童教育学科の学生がハンドベルで「喜びのうた」などを演奏した。

司会を務めたライブラリサポーターからの「声楽をやった良かったことは」という質問に対し、西尾さんは「歌を習っていなかったら、勉強もなかった。声楽をやっているからこそ、人生が生き生きとしている」と語った。

コンサートの最後は参加者全員で「きよしこの夜」を歌い、西尾さんと菅谷さんに花束を贈呈した。



「就活も教育の一環」、「学生に伸びしろを」



保護者会「武蔵野会」の日下美佐子会長から寄附を受け取る横須賀学長
(右から2人目)

桐華祭が終わり、秋も深まった平成25年11月9日、本学の教育理念や就職支援の取り組みなどについて保護者と意見交換することを目的に、「保護者会 in 浦和」がさいたま市の浦和ロイヤルパインズホテルで開催された。学外開催は24年の川越市内に次いで2回目で、保護者約120人が参加し、教職員らと懇談し、親睦を深めた。

保護者会では十文字一夫理事長と横須賀学長があいさつに立った。

十文字理事長は、本学の就職支援に触れながら「就職先を丁寧にリサーチしながら、一人ひとりの学生の特徴や長所を把握し、的確なアドバイスができるよう留意している。時間はかかるが、就職支援は単なる事務ではない。

挫折経験から成長することも含め教育活動の一つだという考えで取り組んでいる」と説明した。

横須賀学長は、大学が目指す学生像について、「伸びしろのある学生を育てたい。4年間をのんきに過ごせばあっという間だ。自らを鍛え自分の能力を発揮できる人を育てたい」と語った。

その後、本問修就職支援部長が、24年度の就職実績と25年度の就職活動の状況を報告した。

懇談会場では学科ごとにテーブルが設けられ、打ち解けた雰囲気の中、教員と保護者が日頃の学生の様子や就職活動の様子について懇談した。

(中村有香記者)

保護者会 in 浦和に120人



あいさつする十文字理事長



「叶えたい、その気持ちが『十(プラス)』となる」

最優秀賞

「叶えたい、その気持ちが『十(プラス)』となる」

福田 春香 メディアコミュニケーション学科3年
「幼稚園の先生や管理栄養士など学生は夢を持って大学で勉強している。それを叶えられる大学だということを伝えたい。『十』のアイデアはふっと思いついた」

優秀賞

「『もっと』が生きる、今ここで。」

小林優菜子 人間発達心理学科1年
「もっと向上したい、という気持ちを生かせる大学になってほしい、そんな願いを込めて作品を考えた」

「夢を実現! 女子力UP! 十文字学園」

小河真琴・井口麻利亜・志村洋美・中野ひかり 生活情報学科1年
「授業中に皆でアイデアを考えた。目的を持って大学に来てそれを実現したいという思いを表現した。女子力を強調したかった」

本学のキャッチコピー決定
すまいるエフエムの時報で活用

「叶えたい、その気持ちが『十(プラス)』となる」。

十文字学園女子大学の「キャッチコピー」が正式に決定した。今後、さまざまな分野で大学のPRに活用されるが、その第一弾として、コミュニティFMラジオ「すまいるエフエム」(朝霞市)の毎週月曜日午後4時の時報として使われている。音声収録は、コミュニケーション学科4年の坂上今日子さんに依頼。かわいらしさの中に明るさも加

わった仕上がりとなっている。大学のキャッチコピー作りは広報委員会が中心となり、昨年9月から学生を対象に作品募集を開始した。

約1カ月で367作品もの応募があった。広報委員会の1次審査で10作品に絞り込み、11月に学生投票を実施した結果、メディアコミュニケーション学科3年の福田春香さんの作品が最多票を獲得し、最優秀賞に決定。十文字の「十」をプラスと

読ませるアイデアに多くの支持が集まった。また得票数の2、3位を優秀賞とした。

12月11日に学長室で表彰式が行われた。最優秀賞を受賞した福田さんから6名が出席し、横須賀学長から表彰状と賞金が贈られた。それぞれ賞金は最優秀賞が10万円、優秀賞が各5万円。

表彰式で横須賀学長は「賞金を弾んだかいがあつてか予想以上の応募数だった。今後は積極的な活用策を検討し、多くの人に触れてもらいながら、学生募集に結びつけたい」と語った。



学生がデザインした「十文字メディアニュース・第4号」の広告にも活用された



サイバー犯罪から子どもたちを守るには?



今回の保護者会では、埼玉県警察本部委託のスクール・ネットワーク・アドバイザーである内山統子さんを講師に招き、情報セキュリティ講演「楽しいはずのインターネット」が開かれた。

内山さんは、パソコンやスマートフォンが絡んだサイバー犯罪やネットワーク犯罪を中心に、インターネットの危険性や使い方の留意点などについて解説。途中「個人情報漏えいの恐怖」と題し、疑似体験アプリを利用したデモンストラーションも行った。

最後に「ネットの世界では、自分の身は自分で守る」「子どもは保護者が守ることが必要だとし、問題が生じた際には、最寄りの警察署相談窓口を利用するように呼びかけた。

(森美雪記者)



学内の畑で育ってくれた野菜に感謝
ニコニコ農園部の「大根感謝祭」



無事の収穫を祝う
イベントを楽しむ

ニコニコ農園部は、現在1年生19名、2年生3名、3年生8名の計30名で活動中だ。主な活動内容は、野菜の育成、地域の高齢者の方との交流、桐華祭の参加、収穫した野菜を使ったイベントの開催などとなっている。

大学内の畑では、大根、チンゲン菜、トマト、なす、唐辛子、きゅうり、いちごなど、多岐にわたる野菜を栽培。また、各季節のイベントとして、昨年7月にカレーパーティー、8月には夏野菜の収穫、11月にはサツマイモ掘りを行ってきた。12月17日から19日には大根感謝祭と銘打ち、学内の畑で大根の収穫を行ったほか、芋煮会も開催。部員一同「野菜栽培」という体験を通して、育てることの難しさを楽しませて学んでいる。

今夏、教員免許状更新講習を実施
最新の知識技能を身につける場

希望者はHPまたは募集要項にて確認を

本学では、平成26年度も教員免許更新のための免許状更新講習を実施する。教員免許更新制は、教員が定期的に最新の知識技能を身につけることで、必要な資質能力を保持し、社会の尊敬と信頼を得られるよう、平成21年4月に導入された。本学では平成21年度から5年間で225名の卒業生が受講した。平成26年度の予定は、必修講習が7月31日・8月1日の2日間、選択講習が8月4日・5日・6日の3日間。受講対象者、申込み期間、内容等の詳細は3月以降本学のホームページまたは募集要項でご確認ください。【お問い合わせ】学生支援部・教職支援課
E-mail: kyosyoku@jumonji-u.ac.jp
TEL: 048-477-0576

大学サッカー部 3部リーグ初優勝を果たす

前年度の悔しさをバネに
厳しい練習で実力を伸ばす

昨年8月27日に開幕し、約3カ月間試合が繰り広げられた関東大学女子サッカーリーグにおいて、本学サッカー部が3部初優勝を果たした。前年度は下位に沈んだが、今年度は石山隆之新監督や新指導スタッフを迎えて、さらにスポーツ特待生2名を含む新入部員6名も加わり、新たな気持ちでリーグ戦に臨んだ。2部昇格をかけた入れ替え戦は惜しくも1対1の引き分け。3部残留でシーズンを終えたが、3部 MVP に伊藤千晶(幼児教育学科1年)、ベストイレブンにも本学から3名の選手が選出されるなど、来年度以降に繋がる大きな成果を残した。



もっと増やそう!! 節トモ(節電トモダチ)
もこやんと節電



「あったかファッション」で
手軽に、オシャレに節電を

今冬は数値目標を伴わない節電要請となったが、本学では年間を通して、教育研究活動に支障のない範囲で節電に努めている。構内には省エネ推進オリジナルキャラクター「もこやん」のポスターを掲示。帽子やマフラー、発汗素材の服の着用など、少しの工夫でできる節電への協力を呼びかけている。

人事異動

新任・特別任用教員

- 21世紀教育創生部 特別任用教授兼事務局参与 石野榮一 (2013年6月1日付)
- 人間生活学部特別任用教授 藤本正徳 (2013年10月1日付)
- 21世紀教育創生部特別任用教授 萩 志強 (2013年10月18日付)
- 人間生活学部有期助手 安田哲也 (2013年10月18日付)

客員教授

- 客員教授 奥 恒行 (2013年6月1日付)

特命教授

- 特命教授 横山賢太郎 (2013年7月18日付)

退職

- 人間生活学部有期助手 増澤拓也 (2013年9月30日付)
- 人間生活学部准教授 横山貴美子 (2013年12月13日付)

十文字ニュース

テレビ朝日の新井麻実さんが転職体験語る メディア十文字会の特別講演会

就活のツボ聞く進路相談
分科会にも3年生25名

本学学生のメディア業界進出を後押しする「メディア十文字会」の第2回総会および特別講演会が昨年11月26日、本学で開かれ、メディア産業研究所に所属する教職員や学生約70名が出席した。

特別講演会では、テレビ朝日コンテンツビジネス局の新井麻実氏が「メディアで働く女性のキャリアデザイン」と題して講演。リクルートから外資系IT企業AOLを経て2004年にテレビ朝日に入社した新井氏が、コンテンツビジネス等の最前線で飛び回る日常をリアルに語った。

転職を恐れるのではなく、むしろメディア企業で意義ある仕事をしたいという必然性の選択としてとらえる新井氏の積極性は、メディア業界への就職を志す学生たちの考え方の幅を広げる機会となった。出席者は、結婚後も含め働き盛りの女性の就業体験に刺激を受けた様子で、「就職しても結果を出すまで投げ出さない大切さを学んだ」「経験や人脈を人生で得られることの重さを知った」などの感想が寄せられた。

講演終了後は第2部として、就活解禁を目前に、メディア業界へ



分科会で助言する新井氏、右奥は中島氏、左奥は石野氏

の就活準備に努める3年生25名(メディアコミュニケーション学科、生活情報学科、人間発達心理学科)が参集し、軽食のサービスも提供されるフランクな雰囲気の中で、進路相談会が開かれた。

学生たちは各々、テレビ朝日の新井氏、広告会社大手アサツーディ・ケイクリエイティブプランナーの中島和哉氏、埼玉新聞社元編集局長(本学特任教員)石野榮一氏を囲んだ分科会で、就活の心構えやツボなど、活発に質問を行った。中島氏とのやり取りを通して「目に見える形で、世の中に出ていくものをつくる大切さ」の認識を深めた江田茉莉さんは、「才能は大事だが、なにくそ、今に見ていろ」と自分の中の引き出しを探し続ける人にもチャンスはあると感じたと気を引き締めていた。

授業アンケートをテーマとした
ざっくばらんなケーキミーティングを実施

先生と学生が意見交換
「結果を反映した授業を」

昨年11月20日、カフェテリア会場に、教員と学生が授業アンケートに関する意見を交わすケーキミーティングが開かれ、参加した約30名が5グループに分かれて話し合った。学生からは「分量が多い」「適当にやってみよう人がいる」といった否定的な意見が出る一方、「アンケート結果を反映した授業をしてくれる先生もいる」と肯定的な声も。ケーキを食べながらの話し合いは、教員、学生双方にとって充実した時間となったようだ。

横須賀学長は、ここで出た意見



見を学内運営に生かす考えを強調した。(中村有香記者)

就活スタート目前の学生の要望に応え
卒業生との懇談会を開催

真剣な面持ちの学生たち
打ち解けた姿も

昨年11月16日、キャリアセンターでは、各分野で活躍する卒業生12名を招き、学生との懇談会を開催した。本会は、キャリアセンターに寄せられた就職活動解禁を間近に控えた学生からの「直接卒業生から話を聞きたい」という声に応えたもの。卒業生に協力を仰いで、快諾をいただき開催の運びとなった。当日は3年生50名が参加。仕事のことや、就職活動の準備などについて積極的に質問する姿が見られた。カフェテリアで開催された懇談会では、相談会での緊張感がほぐされた学生と卒業生



達、リラックスした雰囲気なかで交流を深めあった。

メディアへの就職を視野にエキスパートゼミ開講

本学が委嘱した特別招聘講師4名によるメディアコミュニケーション学科の「エキスパートゼミ」が25年秋から一斉にスタートした。

卒業研究・卒業制作、就職活動の指導等、メディア業界各分野のプロからの指導を学生が直接受けるエキスパートゼミの講師と指導テーマは、高柳等TBS元プロデューサー（テレビ番組制作）、天沼澄夫キングレコードインターナショナル元社長（音楽ビジネス）、岩本昭治博報堂元新聞局長（広告マーケティング）、アサツーディ・ケイ（ADK）の現役クリエイティブプランナー中島和哉氏（広告制作）だ。

学生は後期授業が始まる前の9月25日にガイダンスを受けて所属ゼミを決定。31名の学生が10月上旬から後期授業終了までの間に5回〜7回にわたって、各講師のもとで専門分野をリアルに学んだ。

受講学生にとっては、専任教員による学びの「発展編」を、第一線のプロの肉声と人生観から吸収する。またとない機会となっている。

講義では座学、制作とも、実際に各分野に就職したら入社一年目から直面する諸課題が設定され、各メディア業界への就職・就業のツボを外さない適切なアドバイスを外さず、励みを含めた熱い指導が行われた。

「これからの就活の心強い支えになった」と学生の声が多く聞かれる中、テレビの



天沼澄夫講師



高柳等講師



中島和哉講師



岩本昭治講師



多くの学生が参加した昨秋のガイダンス

業界のプロが卒業研究・制作にも助言

- テレビ制作
- 音楽ビジネス
- 広告マーケティング
- 広告制作

制作プロダクションに就職が内定した4年の受講生佐々木茜さん（高柳講師のエキスパートゼミ所属）は「どんなものも素材になり得ることを知った。視野を広くして撮れる映像はどんどん撮っていききたい」と意欲的に取り組んでいた。

芸術の秋味わう「伝統文化講座」表現文化学科

日本文化の多様さ、奥深さに触れて

表現文化学科では、芸術の秋にちなんで「伝統文化講座」を3回シリーズにて開催した。第1回の「染物に親しむ」では、新座市の後藤友禅染織工房から後藤猛氏をお招きし、日本の染色史と手描き友禅染の歴史、染物の技法についてお話しいただいた。第2回「尺八―虚無僧の調べを聴く―」では、地無し尺八の製作で有名な小林照明氏が登場。そして第3回は毎年恒例の「能楽ワークショップ」。女流能楽師として活躍の鷗沢光氏に講師をお願いした。

なお、これらの講座は地域の方々、一般の方々にも開放している。来年度も大学HP等で告知を行う予定である。

第4回表現文化大賞の公募テーマは「耀（かがや）く」

2014年度に3年目を迎える短期大学部「表現文化学科」。「表現文化大賞」の公募は今年で4回目となる。今回の課題は「耀（かがや）く」をテーマとした複数のジャンルの創作だ。作品の受付は3月から5月末まで。詳しくは3月に短期大学のホームページに掲載予定。埼玉から世界へ向け、若々しい表現を発信することを目指している。ぜひふるって応募を。



尺八



能



友禅

第4回表現文化大賞公募要項

- 部門**
「耀（かがや）く」をテーマに詩・俳句・短歌・書道・イラスト・写真などを創作
- 公募期間**
2014年3月1日～5月末日
- 対象**
全国の高校生、本学大学生・短大生、本学全卒業生
- 応募先**
短期大学部研究室

十文字 学びのいま



長澤ゼミ（食物栄養学科公衆栄養学）が自治体の食育イベントに参加 6月は墨田区、10月は新座市で啓蒙活動



「チャレンジ！一汁三菜」のカード合わせ遊び



子どもたちとともに豆腐作りを体験

食育展示「ごはんにありがとう」と「チャレンジ！一汁三菜」への思い

昨年10月、食物栄養学科公衆栄養学長澤ゼミは、新座市役所で開催された食育イベントに参加した。小さな子どもにもわかりやすく、食物や栄養の大切さを知ってほしいと考え、私たちがゼミ生が企画したのが、食育展示「ごはんにありがとう」だ。

これは男の子と食べ物の妖精が登場する紙芝居形式で、私たちの食卓に食べ物が届くまでにはどんな人やものが関わっているのかを学びながら、かから（食育の心）探しの旅をするというストーリーとなっている。心がけたのは、専門用語の使用を控えたわかりやすい展示。言葉遣いや言葉の表現、表やグラフの表示方法などの工夫によって、見る人の理解度がより高まることを学んだ。

さらに、「チャレンジ！一汁三菜」と題して主食・主菜・副菜のカード合わせ遊びを用意したところ、子どもたちや親子連れの方々がたくさん集まってくれた。見るだけでなく、自分で考えて体験できるものは、多くの方々

に興味をもってもらえる。そんな発見や手応えを味わうことができた。

（食物栄養学科 公衆栄養学長澤ゼミ3年生）

食育体験コーナー「豆腐作りから学ぶ、食の大切さ」

昨年6月22日、東京都墨田区の食育月間イベントの一つ、キラキラ橋商店会での豆腐作り体験コーナー「豆腐作りから学ぶ、食の大切さ」に、食物栄養学科公衆栄養学長澤ゼミがボランティアとして参加。豆腐屋さんの豆腐作り体験やおからケーキ作りのサポートを行った。実際に原材料の大豆を持って来たり、豆腐を作る機器などの現物を見せるなど、豆腐屋さんの説明はたいへんわかりやすく、参加していた親子連れが興味津々に聞いている様子がとても印象的だった。

また、豆腐作り体験コーナーのスタッフの一人である管理栄養士が、子どもたちに手洗いの解説をオリジナルの紙芝居で行ったが、非常にわかりやすい内容で子どもたちの反応もよく、大いに勉強になった。

食育にはさまざまな方法があるが、やはりいちばんは体験することだろう。食育という難しく思いがちなが、今回の経験を通して、地域でのこうした取り組みも食育につながる大切な活動であること、そして小さな子どもたちに向けた話し方、興味の引き方なども学ぶことができた。

（食物栄養学科 公衆栄養学長澤ゼミ3年生）

卒業生シンポジウムおよび福祉の集いを開催 人間福祉学科



先輩・後輩が忌憚なく意見交換できる貴重な機会

昨年12月21日、同窓会人間福祉部会の協賛を得て、卒業生シンポジウムおよび福祉の集いを開催した。卒業生シンポジウムのテーマは「福祉介護現場の今とこれから」。参加者は卒業生・在校生合わせて130名にのぼった。4名のシンポジストからの職場紹介・現状・醍醐味・事例・理想とのギャップ・大学生へのメッセージなど中身の濃い報告を受け、活発な質問や意見交換が行われた。福祉の集いは卒業生と教員の計42名が参加。先輩・後輩が語り合い、久々に会う友人と親睦を深める、年に一度の貴重な会となった。

（人間福祉学科講師 太田眞智子 記）

地域貢献レポート



十文字の学生が「地域に学び、地域で育つ」ことの大切さは誰でも認めるところ。地域との連携強化の一環として、いま児童教育学科の学生たちによる「さつまいもプロジェクト」とボランティアサークル「ソウキリンくらぶ」の学生が協力した取り組みが着実に実を結びつつあります。「新座産の芋」を介した活動は、東日本大震災で大きな被害を受けた東北地方の人々への支援にもつながっています。芋の植え付けや収穫で真っ黒になった手、お菓子の生地にまみれた手、お菓子販売でお金を受け取った手、そして福島県双葉町から避難している人が感謝で握ってくれた手。学生たちの手に残った2013年の活動を振り返りました。

「いもプロ」と「ソウキリンくらぶ」が手を結び 地元・新座への貢献と東北復興支援を結んだ活動を展開

福島の被災者を励ました「クリスマスロールフェス」

「さつまいもプロジェクト」略して「いもプロ」。地元のさつまいも栽培に協力して地域貢献を果たし、そのお礼として提供されるさつまいもが材料のお菓子を販売し、売上げを東北支援につなげる。この活動に児童教育学科の1年生が取り組んできた。地域連携ボランティアサークル「ソウキリンくらぶ」も福島支援を続けており、今年度はお菓子の製作・販売にも共同で取り組んできた。

この2つのグループの1年間の活動の集大成として、クリスマスフェスを翌日に控えた昨年12月23日、本学カフェテリアを会場に「クリスマスロールフェス」が開催された。埼玉県加須市で避難生活を送る福島県双葉町の方を招いて、ロールケーキで激励しようという趣旨だ。フェスには、双葉町出身で友人同士という関根茂子さん、西尾トヨ子さんの2人が参加。飯田ゼミ生によるダンスや児童教育学科3年有志による合奏も披露し、2人をもてなした。



双葉町の方々によるあいさつ

体験を通して学ぶ大切さを肌で感じ社会貢献を考える

歓迎の言葉を述べたソウキリンくらぶ前部長の仲田麻紗子さん(生活情報学科3年)は、「福島を訪ね、農業を学ぶ中で風評被害の実態を知ることができた。きちんとした知識を持つことの大切さがわかった」と述べ、体験を通して学ぶ意義を強調した。

その後、長さ約30メートルのロールケーキに参加者全員がチョコを使って応援メッセージを書き入れた。関根さんは、避難生活の辛さを語りつつも「温かな方々に支えられてここまで来た。埼玉のことは決して忘れません」と涙ぐんだ。また、西尾さんは、12月初めに都内有楽町駅前で学生たちが手作りのクッキーを売っている姿に触れ「寒い中、一生懸命に売っている学生さんを見て、ありがたいうことだなあと感じた」と学生たちになげらいの言葉を掛けた。

2人と握手を交わした学生たち



長さ30メートルのロールケーキにチョコを使って書いた応援メッセージ

さまざまなイベントに参加 収益は双葉町の学校建設へ

9月には双葉町からの避難者にも味わってもらおうと、加須ふれあいセンターに「タルト」「スノーボール」を届けた。11月以降は、加須市の加須西銀杏祭を皮切りに、新座市の収穫祭、オープンカフェ、グルメ・ゆるきやらフェスティバル等で、収穫したばかりのさつまいもが材料のお菓子を販売。

これらの活動を通して得た20万円の収益は、義援金として双葉町半谷淳教育長に直接手渡した。福島県いわき市内に開校を予定している双葉町の小・中学校の建設費用として活用される予定だ。



学生たちによるダンス



双葉町役場埼玉支所において、半谷淳教育長へ義援金を渡した

地域連携推進機構が発足 COC 採択目指す

地域活性化の核となる 大学を追求

本学は大学の使命として「教育」「研究」に加え、「社会貢献」を掲げている。今後さらに厳しくなる予想される大学間競争を生き残るには、それぞれの機能強化は欠かせないが、中でも大学挙げて地域と結びついた活動は大学の生命線と言っても過言でない。

地域貢献活動を本学で具体化し、組織的な取り組みにするため、今年1月1日付で、横須賀学長を機構長とする「十文字学園女子大学地域連携推進機構」が発足した。学生、教職員全員が何らかの形で地域と結びつく活動、教育・研究に関わり、社会に貢献することを目指す。

本機構は、「地域を学び、地域で学ぶ」を合言葉に、「地域連携推進アクションプラン」の策定や大学と地域を結びコーディネート役を果たすとともに、文部科学省が進める「地(知)の拠点整備事業(通称COC)」の採択を視野に入れている。COCは、大学が自治体等と連携し、全学的に地域貢献を進める大学を文科省が支援するというもの。課題解決の助けとなるさまざまな人材や地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化が目的だ。つまり地域再生や地域活性化の核となる大学の形成をねらうとする。

現在本機構では、平成26年度のCOC採択を目標に、地元新座市や市内各団体との連携協力、全学的な教育カリキュラム策定などを進めている。

新座市商工会・朝霞市教育委員会との協定 これまで以上の連携に期待

新座市商工会と 連携協力に関する協定を締結

昨年12月6日、新座市商工会との連携協力に関する協定を本学理事長室にて締結。佐藤周造商工会会長と横須賀学長は「今まで以上の連携が大きな意義を持つ」と語り合った。この協定により、地域経済の発展と明るく暮らしやすい地域社会の実現、人材育成、学術振興への貢献が期待される。

(沖田有似記者)

朝霞市教育委員会と 「インターシッピング協定」締結

教員をめざす学生が小中学校で就業体験できる機会を増やそうと、昨年12月19日、本学と朝霞市教育委員会は「イ



ンターシッピングに関する協定」を締結した。協定では、本学の学生が朝霞市内の公立小中学校で就業体験をすることを通して、学生の就業意識の向上や教育行政に対する理解を深めることを目的に掲げている。

日本サッカー協会の新プロジェクト 第1回十文字なでしこひろば開催

女子サッカー発展への貢献を 目的にハードとソフトを提供

昨年11月24日、本学にて、一般社団法人十文字スポーツクラブ主催の「第1回十文字なでしこひろば」が開催された。「なでしこひろば」は、日本サッカー協会が「なでしこVISION」に基づき、女子サッカーの普及や女性のサッカー環境の向上を目的としてスタートさせた新たな普及プロジェクトだ。

参加者は地域の小学生18名。元なでし



こジャパンメンバーの柳田美幸さんが特別コーチを務め、十文字高校サッカー部がサポート。日本サッカー協会やフジテレビ、浦和レッズ職員も視察に訪れた。本学園のハードと十文字サッカーのソフトを女子サッカー発展のために活用し貢献するこの試みは、今後さらなる充実が期待される。近い将来、本学学生が主体となり運営できるよう展開していきたい。

(特任准教授 石山隆之記)

「ソウキリンを探せ! 夏休み家族ウォークラリー」に本学学生がボランティアとして参加

約100組の参加者をサポート トラブルなく盛況のうちに終了

昨年8月18日、新座市総合運動公園で開催された新座市主催イベント「ソウキリンを探せ! 夏休み家族ウォークラリー」に、本学学生4名(大野珠美・近藤沙彩・増田絢香・宮原絵理佳)がボランティアとして参加した。ソウキリンは新座市のイメージキャラクターだ。このイベントは、地図を手がかりに、運動公園内5カ所に設置されたスタンプポイントを巡り、クイズに答えながらすべてのスタンプを集めていくというもの。全スタンプを集めた参加者には、特製ソウキリンシールがプレゼントされる。ボランティアとして参加した学生たちは、市職員や他のボランティ



アとともに、総合案内、ラリーポイントでのスタンプ押印、クイズ出題、終了後の撤収作業などを行った。

また9月12日に、新座市総合運動公園内本多の森お花畑で開催された「新座ひまわりプロジェクト」には、本学職員10名がボランティアとして参加した。

卒業までに自己触診ができる女性に



健康管理センター保健師の清水けさ子さんと講習を受ける学生

乳がんのしこりを自分の指先で体感

日本人女性のうち、乳がんを発症する割合は約20人に1人。患者数は増加の一途をたどっており、近年では若年化の傾向にある。しかし早期発見できれば約9割が完治し、乳房温存療法で乳房を残せる可能性もある。早期発見が乳がんの被害者を減らす鍵なのだ。

本学では、学生と教職員を対象に「乳がん自己触診講習会」を行っている。健康管理センター保健師の清水けさ子さんが講師となり、実物の乳房と同じ形、感触の模型を使って触診体験をする。触診の基本は、親指以外の指の腹で「の」の字を書くように触ること。乳がんの症状であるしこりは胸の周辺にできる可能性もあるため、鎖骨の下あたりから脇の下、胸の下の方までまんべんなく触ることが重要だが、一度触っただけでは見逃してしまう場合もある。

それだけに講習で触診体験する意義は大きく、受講者からは「コツがわかった」と満足の声が挙げられた。なかには「家族ががんになり、不安を感じたから来た」という学生も。「健康の相談に勇気があるかもしれないが、臆せず来てほしい」と、清水さんは呼びかける。



「自分の身体を自己管理できるように」と話す齋藤麗子健康管理センター長

講習はわずか20分、受けないと損

所要時間は20分程度なので、ぜひ一度講習を受けてみてはどうだろう。乳がんの微妙なしこりの感覚を指先で捉える練習ができる、またない機会だ。同センターでは、怪我人や病人がいなければいつでも対応可能とのこと。予約も受け付けており、グループでの受講がお勧めだ。予約日は月～金曜日、午前9時～11時半もしくは午後2時～4時半。予約先は本学の健康管理センター（048-1477-11292）まで。

Student's Eye



模型を用いた学生への講習

乳がんの危険性を高める要因は、年齢が40歳以上、出産しない、タバコを吸う、飲酒、閉経後の肥満などさまざま。細身で胸が大きいといったスタイルのいい人も危ないという。実際に講習で模型のしこりを探してみたが、しこりの感触がどんなものかわからないため、しこりなのかそうでないのか区別するのが難しかった。また模型には5カ所やしこりがあるのだが、2〜3個はすぐに見つかったも残りがなかなか見つからない。しこりが「ある」とわかっていながら見つかるまで何度でも触診するが、あるかどうかはわからない自分の身体では何度も繰り返し触ることはいくらでも。漠然と他人事のように感じていたが、これが自分の身体だったと思うと怖い。あのしこりの感触は一生忘れないようにしたい。

(深田安利記者)

教員トピックス

本学の研究活動を地域に活かすために「教員 NAVI」を発刊!



自治体や民間団体等へ本学教員を詳しく紹介
十文字学園女子大学の研究活動を地域に還元し、地域連携協力をより推進するため、「NAVI」地域発展の力となるために、今できること2014」を発行した。
本学の地域貢献をさらに発展、深化させるためのツールとして、また、地域の課題解決の一助として、本学教員124名を研究分野別、五十音別に分類するとともに、キーワード、各人の紹介、専門領域・研究内容、社会における活動状況等を



掲載している。
A4版68頁。本誌は、自治体・民間団体等に配布し、各種部会・委員会等の委員選出や研修会、講演会・セミナー、イベント等の講師依頼時に役立てていただくもの。お問い合わせは、十文字学園女子大学 社会交流支援課・電話0481-47710958まで。

食物栄養学科 田中茂教授著

『PM2.5の脅威から身を守る』の一読を



昨年12月に中央労働災害防止協会から『PM2.5の脅威から身を守る』を出版した。これは「PM2.5とは何か」「PM2.5の健康への影響」さらに「PM2.5から身を守るには」などについて著述したもの。イラストを多用し、中高生にもわかりやすく

今注目のPM2.5についてわかりやすく解説した小冊子

生活情報学科 星野敦子教授

北野生涯教育振興会研究助成を受賞



授賞式に出席した星野敦子教授(上段右から3番目)

研究成果の社会還元が期待され助成の対象に

このたび、公益財団法人・北野生涯教育振興会より研究助成を受けることとなり、昨年11月8日、ホテルオークラでの助成金授賞式に出席させていただいた。同財団は、1976年以來生涯教育の観点から調査、研究をしている個人またはグループに対し、調査・研究費用の助成を継続しており、日本の生涯教育の土台固めに貢献している。助成の対象となった研究は、「地域におけるボランティア活動の生涯学習効果——自己実現を促進する公助のあり方——」で、研究期間は2年間。新座市を中心に地域の方たちのボランティアの実態、新座市民総合大学の貢献、また生涯学習としての効果について、調査・分析を進めていく。

(生活情報学科教授 星野敦子 記)



(食物栄養学科教授 田中茂 記)

Admission Info

最新入試情報

平成26年度 入試日程

センター試験利用入試Ⅲ期

学部・学科	出願期間	試験日	合格発表日
人間生活学部 人間福祉学科 生活情報学科 メディアコミュニケーション学科	郵送: 2月18日(火)~3月10日(月) 窓口: 3月10日(月) 9:00~15:00	1月18日(土)、19日(日) 本学の個別試験なし	3月17日(月)

AO入試

学部・学科	形式	エントリー期間(郵送必着)	試験日	選考内容
人間生活学部 人間発達心理学科	課題形式	AO入試7: 2月26日(水)~3月11日(火)	3月14日(金)	エントリーシート 面談 課題(小論文、高校までの基本的な力を問う問題)
人間生活学部 人間福祉学科 生活情報学科 メディアコミュニケーション学科	対話形式 有資格形式	AO入試7: 2月26日(水)~3月11日(火)	3月14日(金)	エントリーシート 面談 レポート(対話形式のみ)
短期大学部 表現文化学科				

- 1 対話形式・有資格形式の試験日は、上記日程で都合のつかない場合には相談に応じます。
- 2 AO入試の詳細については、『AO入試のご案内』をお取り寄せください。 お問い合わせ: 募集・入試課 ☎0120-8164-10
- 3 入試相談会にてAO入試の詳細を個別に説明します! ぜひご参加ください。

編入学入試

学部・学科	募集定員	出願期間	試験日	合格発表
人間生活学部 人間福祉学科(社会福祉コース) 生活情報学科 メディアコミュニケーション学科	5名 5名 5名	3月3日(月)~3月7日(金) 郵送必着	3月14日(金)	3月17日(月)

※ 人間福祉学科は、卒業時に社会福祉士国家試験受験資格を取得できます。

学校見学

随時受け付けています。事前予約は不要。
HPにて開室カレンダーを公開しています。参考にしてください。
(月)~(金) 9:00~17:00 (土) 9:00~12:00
※日曜祭日は除く。

オープンキャンパス

3月23日(日) 13:00~16:00
▶場所: 本学新座キャンパス
事前予約不要/入退場自由



入試相談会

2月27日(木) 10:30開始
▶場所: 本学新座キャンパス
事前予約不要



●お問い合わせ 募集・入試課 ☎0120-8164-10(はいろうよ! 十文字) E-mail: boshuu@jumonji-u.ac.jp

Extension News

公開講座のご案内——大学開放・地域連携推進センターから

平成25年度公開講座レポート

今年度も多彩な公開講座をお届けしました。

本学、大学開放・地域連携推進センターでは、今年度も公開講座、桐華祭講演会、小学生対象の「子ども大学にいざ」、彩の国大学コンソーシアム主催の講座など、多彩な「学びの場」を提供してまいりました。その中から一部、講座内容や会場の様子をご報告します。

桐華祭講演会

10月の桐華祭では、二代目高橋竹山氏をお招きし、「魂の音を求めて-二代目高橋竹山 津軽三味線の世界-」を開催しました。台風の影響も心配されましたが、多くの参加者があり大変好評でした。(5ページに講演要旨)

新座市内大学公開講座

新座市教育委員会との共催で開かれた公開講座(全3回)で今年度は「くらしを見つめる~語り伝えることの大切さ~」をテーマとし、9月~12月にかけて開催されました。

第1回「いま、何を議論すべきなのか ~エネルギー政策と温暖化政策の再検討~」は経団連21世紀政策研究所研究主幹・NPO法人国際環境経済研究所所長の澤昭裕氏をお招きし、マスコミなどで取り上げられる事例をわかりやすく解説していただきました。

第2回「虐待問題の現状と今後の課題を考える」では、虐待について児童、高齢者、障害者ごとに防止法の整備がなされているが、実際には深刻な事例が発生しているため、それぞれの法律の視点、実際の現場の状況などについて横浜弁護士会の川島志保氏(弁護士)、埼玉県児童相談所副所長の高橋均氏(社会福祉士)、埼玉県社会福祉士会副会長の山本進氏(社会福祉士)など各分野でのスペシャリストに解説していただきました。



彩の国大学コンソーシアム公開講座「高齢期の人権保障」

第3回「伊達家作法に学ぶ日本人の美意識」では、伊達家伯記念會の仙台藩作法指南役である池田峯公氏をお招きし、礼法の歴史と礼法とは相手のために思いやりの心を込めて行う作法であること、伊達政宗公の美意識としては「敬(けい)する=敬(うやま)う、恥:慎(つつし)む(両方の意味)」という心を常に持つことであったと、戦国時代の裏話を交えながら、解説していただきました。



彩の国大学コンソーシアム公開講座

人間福祉学科の片居木英人教授が、9月に「高齢期の人権保障」と題した講座を実施し、参加者は熱心に耳を傾けました。

子ども大学にいざ(全4回)

新座市内小学校に通う小学生4~6年生を対象に本学では2回分を担当し、9月に第1回「はてな学:空高く飛ばしてみよう、水ロケット」を開催しました。井口磯夫名誉教授がロケットの飛ばし方を講義した後、ペットボトルで水ロケットを組み立て、グラウンドに出て飛ばしました。ロケットは空気入力で空気を圧縮し、その圧力で水を噴射して飛ばすため、高く遠くへ飛ばすと大きな歓声が上がっていました。翌10月には、メディアコミュニケーション学科の松永修一准教授が「ふるさと学:めざせ、ことば遊びのプロフェッショナル」を実施。本学アクティブラーニング室を使用し、iPadを使用した講義で昔から伝わる「ことば遊び」を解説する中、受講生の子ども達がチームごとにゲーム感覚で回答する形で行い、終了時には「ことば遊びマスター」の証明書を受講生一人ひとりに授与しました。



子ども大学にいざ 第1回



子ども大学にいざ 第2回

予約方法・お問い合わせ先

平成26年度の公開講座の詳細につきましては、本学ホームページまたは『新座キャンパスだより』をご覧ください。ご案内パンフレットをご希望の方は、大学開放・地域連携推進センターまでご連絡ください。

大学開放・地域連携推進センター
TEL:048-477-0958(直通) FAX:048-477-0764
【ホームページURL】
E-mail:ext@jumonji-u.ac.jp